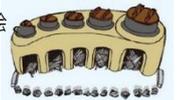


旧中島家住宅 へっつい通信 vol.4

発行：市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会
発行日：2015 年 7 月 4 日（土）



火洒要慎 ～かまどと愛宕の神さま～

栗東市内の民家の台所には「火洒要慎」と記されたお札が貼られていることがあります。かまどがあった時代には、その脇に貼られていたこのお札、京都の愛宕神社で出されたもので、火事の災厄を除ける効果があるとされます。

現在のようにガスや電気ではなく、火のついた薪をくべて調理するかまどでは火事への恐れが格段に高く、火伏せの神さまとされる愛宕の神さまへの信仰が高かったのです。一方、愛宕山の頂上（標高 924m）にある愛宕神社への参詣は、かなりの労力が必要でした。栗東市域では、複数の家々で“愛宕講”とよばれる組織を作り、年 1 回代表して参詣する代参人を決め、仲間の家々に貼るお札



▲ガステーブル上、レンジフード脇に貼られたお札（2015 年 山入自治会館台所）

栗東市内 愛宕祠・愛宕納札石碑所在場所

① 大橋 愛宕納札石碑	② 出庭 愛宕納札石碑
場所 三輪神社(栗東市大橋 1 丁目 6)境内	場所 出庭神社(栗東市出庭 280)境内
備考 三輪神社神事頭屋が 4 年に 1 回愛宕神社へ代参し、札を納める。	備考 出庭 北出愛宕講・出庭愛宕講・出庭神社宮世話が管理。出庭愛宕講が毎月 23・24 日に石碑脇の灯笼に灯を灯す。
③ 今土 愛宕祠	④ 蜂屋 愛宕納札石碑
場所 今土公民館(栗東市高野 14-3)脇	場所 蜂屋公民館(栗東市蜂屋 205)脇
備考 今土自衛消防隊が管理。毎年 8 月の自治会夏祭りの際、供物を供えて参る。	備考 蜂屋のお組・た組 2 組の愛宕講が管理
⑤ 上砥山上向 愛宕納札石碑	⑥ 蔵町 愛宕納札石碑
場所 上砥山から御園(中村)へ抜ける道路脇 北緯 34° 59' 29" 東経 136° 1' 36"	場所 薬師寺(栗東市御園 316)境内
備考 明治 42 年建立。現在管理している講はない	備考 蔵町 愛宕講が管理。毎年 7 月 23 日頃、夕方から夜間にかけて、講員が供物を供えて石碑前で会食する。
⑦ 上砥山 西出講愛宕納札石碑	⑧ 東坂 愛宕納札石碑
場所 上砥山(川南)山中 北緯 35° 0' 12" 東経 136° 0' 49"	場所 春日神社(栗東市東坂)境内
備考 上砥山 西出講が管理。正月、餅を供える。	備考 東坂にある愛宕講 2 組のうち 1 組が管理。正月に講員が参る。
⑨ 雨丸 愛宕祠	⑩ 辻越(シモ) 愛宕祠
場所 雨丸公民館(栗東市荒張 866-1)隣接地	場所 辻越で“お堂”とよばれている大専寺(辻越)に隣接する雑木林中 北緯 34° 59' 41" 東経 136° 1' 44"
備考 雨丸 愛宕講が管理。毎年 7 月 23 日に供物を供えて夕方講員が参り、祠前で御神酒をいただく。	備考 辻越(シモ) 愛宕講が管理。7 月 23 日前後に供物を供え、夕方講員が参る。
⑪ 山入 愛宕祠	⑫ 辻越(カミ) 愛宕祠
場所 常福寺(栗東市御園 1165-1)境内	場所 辻越の雑木林中 北緯 34° 59' 29" 東経 136° 1' 36"
備考 山入 愛宕講が管理 毎年 7 月 23 日に供物を供えて夕方講員が参る。	備考 辻越(カミ) 愛宕講が管理。毎年 7 月 15 日に近い土曜日に供物を供え、夕方講員が参る。当日は祠へ至る参道入り口に提灯がかかる

や、講によっては愛宕神社の神花とされる榊を受けてきています。台所の「火洒要慎」も、こうして代参人が受けてきたお札なのです。

栗東市内では 7 月 23 日を中心に講員全員が集まり、飲食をともにする場が設けられます。これは愛宕神社の祭日、“千日詣”の日程に合わせたもので、千日詣がかつて旧暦の 6 月 23～24 日に行なわれていたことに由来しています。この日は愛宕神社にお参りすると、名前のとおり千日分お参りしたご利益があるとされています。現在、千日詣は 7 月 30 日～8 月 1 日に行なわれており、日中・夜中の隔たりなく参道は互いに「お上りやす」「お下りやす」の声を掛けながら、神社を目指して上る人、お参りを終えて下る人であったがえします。

代参人とならなかった講員も、それぞれの講で愛宕祠や掛軸に表された愛宕の神さまに手を合わせ、千日分のご利益を受けるのです。

IH 調理器が普及した今日でも、栗東市域で愛宕講が維持されている地域は多く、7 月中は愛宕祠を囲む講員の姿を目にする事もあるでしょう。愛宕祠やお札を納めるための石碑は意外と身近な場所にあります。みなさんがお住まいの地域で探してみても楽しいかもしれません。



▲古量を解体し、かまどの土の材料となる藁を取り出しました。



▲量から取り出した藁は押し切りという道具で細かく刻みました。



▲切った藁と、前回と今回のワークショップで細かくした土をフネに入れ、土を捏ねました。しばらくすると藁は発酵し、繊維質だけが残ります。



▲表面仕上げ用の土を取り分ける作業も行ないました。



▲土間ではワークショップと並行して、かまど部分に三和土を復旧。子どもたちも叩き締めるためジャンプ、ジャンプ!!



▲かまどの位置決めも行ないました。

ドヘツツイ再生レシピ③～7月4・5日ワークショップの手順～

指導：宮奥 淳司さん (宮奥左官工業 一級左官技能士)
コーディネート：岸田 知之さん

7月4日・5日に行なうワークショップでは、かまどの躯体を内型を使って成型します。内型を5つ並べ、そのまわりに団子状にした土を貼り付けて肉付けしていきます。また、焚口部分には瓦を鳥居型に組んで強化します。

具体的な作業の手順

作業① 各火袋の位置に円形の内型を置く。焚口の位置を決め、焚口の両サイドとなる部分に縦長った瓦を置く。

作業② ①で置いた焚口の瓦部分を除いて、内型に合わせて泥団子を並べて積み上げる。その際、板や木製のコテで叩き締めながらかまどの形に成型する。

作業③ 焚口の上部分になる瓦を、①で立てた両サイドの瓦の上に置く。この周囲にも泥団子を置き、かまどの形に成型していく。

作業④ さらに肉付けして形を整え、残すは仕上げ塗りという状態まで成型し、乾燥させる。



作業② 焚口の両サイドの瓦を置いたら、その周囲を除いて破線のあたりまで、泥団子を積み上げる。

作業③ 焚口の上部となる瓦を置き、鳥居型の瓦の周囲も泥団子を積んでいく。



作業① 最初に内型を置き、焚口の両サイドになる瓦を設置する。



▲写真は宮奥淳司さんがアフリカ・タンザニアでかまど作りをされた際のもので、内型を使用したかまど作りの参考のための写真です。今回行なう内容と、全く同じではありません。

次回のかまど再生ワークショップは
8月8日(土)です。これが最終のワークショップです。登録された方はよろしくお願ひします。そのほかの方も見学自由です。